「阿Q正傳」をめぐる何其芳・李希凡論爭について

瀨　戸　宏

古典的名聲が確立した文學藝術作品をどのように評價するのか、という問題が文學藝術運動の上で大きな比重を占めている事はいうまでもない。とりわけ社會主義國の場合には古典的作品とは過去の非社會主義體制下で創造された作品を指すのであるから問題はより深刻である。評價を誤まれば反社會主義的要素をばらまく事になりかねないからである。問題はもはや文學藝術運動にとどまらず、出版、檢閲などの國家の文化政策の領域にまでかかわることになる。この古典的文學藝術作品の評價をめぐる論爭は、新中國に於ても紅樓夢論爭をはじめ數多くの論爭、討論が行なわれてきた。この小論では、「阿Q正傳」をめぐる何其芳・李希凡論爭を考察し、現代中國で今日なお進行中の古典再評價運動の全面的檢討の爲の、筆者にとつての一つの足がかりとしたい。「阿Q正傳」は言葉の嚴密な意味では古典とはいえない作品であるが、それにもかかわらずこの論爭をとりあげるのは、「阿Q正傳」が中國近代文學の中でほぼ名聲の定まつた作品である事、何其芳・李希凡は他の古典文學評價論爭にも重要な役割を果した批評家である事、何其芳・李希凡はそれぞれ文化大革命での被批判者と批判者の論理を代表しているとみられる事による。

一

一九五六年は魯迅逝去二十周年であり、この年中國では五四運動以降最大の作家を記念するさまざまの論文が新聞雜誌をにぎわした。當時中國共產黨の代表的文化イデオローグとみなされていた何其芳が「阿Qを論ず」を人民日報紙上に發

表したのは、この年の十月十六日であつた。[1] 何其芳のこの論文は、阿Qの典型的性格の分析にとどまらず、紅樓夢論爭にも關連させつつ「三國演義」の諸葛亮、ドン・キホーテ、「西遊記」の妖魔、「紅樓夢」の劉ばあさんなどにも論及し、包括的な典型論をうちたてようとしたところにその特徴があつた。「阿Qを論ず」の主要な論點を、やや長くなるが、引用してみよう。

「階級社會では、本當の人間は、いずれも階級身分を有し階級性をもつている。それゆえ文學作品が描寫する階級社會の人物も階級性をもたずにはいられない。そして、典型的人物の性格は、確かにいつも階級的本質のある特徴を表現している。しかし、同一階級の中にも、階層が異なり政治傾向が異なり思想が異なり性格が異なる人物が存在しており、これが、文學が一階級の中からも、多種多様な典型を書き出すことができる事を、決定しているのである。これは多分誰も否定できまい。生活の中には更にある現象がある。ある性格上の特徴は、異つた階級の人物の身上のいずれにも見いだしうる事である。文學作品がもしこのような人物を描寫し、この特徴をきわだたせて描寫するなら、その人物が階級身分と階級性をもつていようと、彼の性格上のこの特徴は一つの階級の現象だけではない事が示される。諸葛亮、ドン・キホーテ、阿Qはいずれもこのような典型である。」(文學藝術の春・十頁)

すなわち、典型性は階級性と同一ではなく、典型の典型たる所以は、階級を越えたところにあるというのである。何其芳はこのような觀點にたつて、阿Qの典型的意義は阿Q精神——自己瞞着や弱い者いじめをしてのうさばらし、侮辱に對する健忘などの精神勝利法にあるとし、阿Q自身は辛亥革命前後の雇農であるが、阿Q精神は多くの異つた階級、異つた時代の人物にいずれも發見できるとした。没落過程にある支配階級は、現實に目をつぶり、彼らの反動支配を續ける爲、阿Q精神を發生させ、彼ら自身はそれをぬぐいきれないまま滅亡への道を歩むだけである。しかし、遲れた人民の阿Q精神は、彼らの無自覺によつて發生し、そして人民の自覺が高まり、人民自身が自己批判と相互批判を充分に行なう事によつて、消し去る事ができる。そのように何其芳は考えたのである。何其芳はまた、典型性と階級性を同一視しようとする見解が持つている無理を、「阿Qを論ず」の中で細かく指摘している。

しかし、この何其芳の「阿Qを論ず」はただちに反論を招く事になつた。李希凡「典型新論質疑」(五六年十二月「新港」)

がそれである。毛澤東の支持で藍翎とともに紅樓夢論爭の口火を切つて以後、新進の評論家として活躍していた李希凡は、すでにこの年「『阿Q正傳』簡論」「『阿Q正傳』について」という二つの論文を發表していた。[2] 彼によれば、阿Q精神は辛亥革命前後の時期には一つの普遍的現象であり、半封建半植民地である清朝の支配者およびそのさまざまな奴僕が阿Q主義をうみそだてる根源であつた。帝國主義勢力の壓倒的な力を前にして清朝支配階級は、中華思想の幻影を追い自己瞞着にふけるほかなすすべを知らなかつたのである。そして支配階級によつて形成された奴隷主義、失敗主義は、支配階級としての封建階級の支配と彼らによる傳播によつて、大きな被害を被支配階級にもたらした。李希凡の考えでは、阿Qはこの被害を受けた者の典型である。「しかし、明らかに、この精神的害毒をうけた阿Qは、これらの奴隷主義の創造者たちとは異つている。阿Qの性格中に潛在している反抗的要素、これは彼の被壓迫階級としての地位が規定している。しかしこの反抗は失敗主義の歪曲を受け、軟弱無力な精神勝利法に變わつてしまつた。[3]」〔「弦外集」十八頁〕このようにして阿Qの性格が形成されたと李希凡は考えるのである。

李希凡が何其芳を批判したのは、次のような點についてであつた。

- 何其芳は、阿Qという典型的性格の「最もきわだつた特徴」（原文では「最突出的特點」）を、特定の時代、社會、民族および階級の產物としてとらえるのではなく、人類の普遍的弱點であると考えている。何其芳は、阿Q主義がその封建社會の物質的基礎を反映したイデオロギーをもつという特徴を、否認する。何其芳は阿Q主義の根源を明らかにする事ができない。
- 「……何其芳同志は、この困難な問題（積極的に反抗すべき農民が消極的な阿Q精神をもつ矛盾—引用者）の探索で、農民の阿Qと消極的な恥ずべき阿Q精神の『つまるところ』の『相適應』を捜すことなく、阿Qの性格の時代的社會的現實的內容を去勢し、典型的性格の複雜な現象を純化された人類の普遍的弱點へと導き、解決を得ようとしたが、實質的にはこれは一種の單純化の極端である。」〔「弦外集」四三頁〕
- 何其芳のこの觀點は、「典型論を永恒不變の人間性論の舊い陷穽に引きこむ」ものである。

李希凡はこのように「典型新論質疑」で、何其芳の典型論は、つまるところ階級性を喪失した人間性論におちいるものであると強く指摘し、さらにアヘン戰爭以後の中國社會から

阿Q精神が產み出されてくる過程を、もう一度繰りかえして分析した。何其芳と李希凡との違いは、何其芳が典型的性格の中に階級性に完全には還元できないものを見出し、それは異つた階級の間にも現われうるものと解釋するのに對して、李は階級性を離れた典型的性格はありえないと考える點にあるといえよう。

ただ、五六年段階での李希凡の論文には、後に何其芳に指摘され李自身それを認めたように、細部には彼の何其芳への反論の論理と矛盾する部分がいくつかあり、その上、文化大革命の論理ならば確實に修正主義の烙印をおされる部分すら存在している（例えば「阿Q正傳簡論」の末尾で魯迅の人道主義を指摘している部分など）。これは六四年に彼が辯明したように「個別の誤り」という事もいえようが、より根本的には、李希凡が七三年に告白したように、「私の文學藝術思想が彼（周揚―引用者）と一致する所があつた」爲にもたらされたものであろう。

しかしながら、このような李希凡の反論に對して何其芳は再反論を行なわなかつた。それどころか一九五八年に何其芳が執筆した「『紅樓夢』を論ず」では彼の典型論を再びくりかえして述べた。この時點（一九五十年代）では、何其芳は、李希凡の見解に反論する必要を彼の文學生活の上で認めなかつたのかもしれない。何其芳は、李希凡の意見は、未熟な「左」の意見でわざわざとりあげるに値しないと考えたのであろうか。何其芳の「詩歌形式の問題の討論について」（一九五九年）に對しても李希凡は反論を行なつたが、何其芳は再び默殺した。

ただし、「文學藝術の春、序文」によれば何其芳は李希凡に口頭では意見を述べたようである。その內容は、「典型新論質疑」は何其芳の原意を歪曲している、という內容であつたらしい。李希凡は「典型新論質疑」を「弦外集」に收めるにあたつて、何其芳の意を入れ若干の修正を行なつたようである。

二

魯迅逝去二十周年から八年たつた一九六四年、何其芳は突然李希凡の批判に對して反論を行なつた。それはまず「收穫」一九六四年第一期に「『阿Qを論ず』について」[4]として發表され、のち「阿Qを論ず」を收めた論文集「文學藝術の春」發行の際（六四年四月）その序文の前半部分となつた。何其芳がなぜ八年もたつてから反論したのか、その理由はわ

からない。何其芳の文章はこの理由にはふれていない。しかしながら、この前後の文藝界の動向をみると、前年の十二月には毛澤東の文學藝術についての第一回の批示がだされ、六四年になると江青が京劇改革を始めている。六四年は、文學藝術界で整風運動が行なわれ、「中間人物論批判」によつて邵荃麟が失脚した年でもある。李希凡は自身が「江青同志の何回もの忍耐強い啓發と教育に負うところがある」[5]ことを現在公然と表明しているが、六四年段階にあつても江青ときわめて近い關係にあつた事は間違いない。李希凡自身がその事を認めている。今、論爭の舞臺裏を、「紅樓夢評論集」三版後記の李希凡の證言をもとに、簡單に述べる事にしよう。

「文學藝術の春」發表後、李希凡は直ちに反論を書きあげ（六月）、「新建設」誌に原稿を送つた。ところがそこで周揚の「審査」を受け、原稿は數ヶ月間握りつぶしにされてしまつた。李希凡は江青に事情を說明した手紙を送つた。手紙を出してから數日後「（中共）舊中宣部科學處某副處長」から李希凡に電話があり、周揚の「指示」にもとづいて文章中の多くの語句を修正し題名を改める事を要求された。李希凡は發表權を得る爲にこれらに妥協し、「典型『共通の名』說は階級論か人間性論か」という原題をとり下げた。副處長は更に論文の中で人間性論[6]に論及する事もやめるように申しいれた。「これは實に人をもうこれ以上耐え難くするものである。私は率直に答えるほかなかつた。これは原則の分岐であり、改める事はできない。」〔同書三〇九頁〕このような經過を經た後、論文はやつと「新建設」六五年第二期に、「阿Q、典型、共通の名およびその他—何其芳同志の典型新論に對する再質疑」として發表された。

李希凡のこの證言には文革を經た後の立場からの整理が當然行なわれていようが、彼の發言を信じるなら、六四年段階で中共宣傳部には相當な內部鬪爭が存在していたわけである。內部鬪爭の正確な事實關係については、わからないというほかないが、何其芳が八年前の李希凡の批判に反論を行なつたのも、江青と周揚をそれぞれ頂點とする中央宣傳部內の抗爭によつて反論執筆をせまられた爲と解した方が、前後の矛盾なく理解できるように思われる。何其芳が李希凡への反論を執筆したのは、發表から考えるなら、六三年十月〜十二月で文藝整風の開始よりやや早いが整風に至る雰圍氣はすでに敏感に感じていたに違いない。何其芳としては反對派からの批判に對して、反論し自己の見解を明確に示す必要があつたのであろう。何其芳が、周揚の側に立つていた人間である

事は間違いない。先の李希凡の證言によれば、何其芳が李希凡への反論を發表した時には、「審査」を受ける必要がなかつたという。

三

しかし不充分な資料による推論はこの位にして、具體的に二人の文章をみていく事にしよう。

まず、何其芳「文學藝術の春」序文(以下「序文」と略記)から。

何其芳は最初に「阿Qを論ず」を發表した後、文學研究所主催の學術討論會で「若干の同志から批判と非難を受け」(傍點引用者)た事を記している。意見の主要は、阿Q精神の階級的根源の分析に集中していた。何其芳は沒落の道を歩む搾取階級からも、遅れた人民の中からもいずれも阿Q精神はうまれうると考えたが、批判者は何其芳の見解は階級分析の方法を離れていると考えたのである。何其芳はこれに對してまず、典型の共通性は階級性で、典型の特殊性は階級性の具體的表現という意見の誤謬を指摘—この意見によるなら、阿Q精神の根源は封建支配階級の思想であるのみという考えと農民の思想であるのみという考えのいずれも成立する—し、典型性と階級性を同一視する見解に改めて反對した。また何其芳は、ドン・キホーテが主觀主義の「共通の名」(原文では「共名」)となり、諸葛亮が封建階級の政治家でありながら、彼の智勇や策謀が人民に愛されてきた事を指摘する。「なぜこのような事實を承認する事が、階級分析の方法を離れることになるのか。」

以上のような、特定の傾向に對する批判を行なつた後、李希凡の批判への反論にはいる。冒頭に李の「典型新論質疑」に觸れて、「我々が別人の意見を批判し反對する時、彼の論點をおし廣げ、誇大化し、甚だしくは改變を加え、しかる後、このおし廣げ、誇大化、改變を根據に別人の誤りを指摘する事をすべきでない」と述べているのをみると、この段階での何其芳と李希凡の論爭には、もはや同志的討論という枠からはみ出るものがあるように思われる。

何其芳は、李希凡に對する反論を次の四點に整理した。

①阿Q精神は、中國のアヘン戰爭以後の一時代の「精神病態」を概括しただけであるかどうか。

②阿Q精神は、半封建半植民地の封建支配階級の思想であるだけかどうか。

③文學上の典型を分析する事は、人物全體と、性格上のある

特徴に適當な區別を加える事かどうか。

④典型の共通性の實生活における影響は典型を研究する根據とする事ができるかどうか。

以下、各々の論點を簡單に整理してみよう。

①については、何其芳は魯迅が表現したのはもつと廣範な精神勝利法であつてアヘン戰爭以後の單なる一時代の精神病態ではない、と明言した。そして李希凡が阿Q精神に一定の限度をつけつつも、歴史的共通性を認めている事を指摘し、論點の違いは、李希凡が阿Q精神の歴史的共通性に限度をつける事を主張している點にすぎない、と對立點を整理した。そして、自分は決して阿Q精神が「古代から現代までの人類發展史を貫いている」などとは主張していないと述べ、論點の違いは、第一點については事實上存在しない事を、示した。

②については、李希凡との分岐は、何其芳は阿Q精神がアヘン戰爭以後の中國に始めて生まれたものではなく、半封建半植民地の封建支配階級が始めて產みだしたものでもないと考えるが、李希凡はそう考えないと述べた後、李希凡が、何其芳の主張はリアリズムの典型論を人間性論に導くものである、と述べた事に對する反論を行なつた。何其芳によれば、人間性の存在を承認することは人間性論ではなく、抽象的な人間性があり超階級的な人間性がある事を認めるのが、人間性論である。そして、阿Q精神などは人間性そのものではなく、きわだつた精神的特徴にすぎない。その存在を農民、支配階級など異つた階級に認めるからといつて、なぜ自分の主張が人間性論になるのか、と何其芳は反論した。

③については、何其芳は典型の共通性と特殊性の關連と區別を考えなければならないとした。典型的形象のような複雜な問題を分析する際にはこのような態度が不可缺であると彼は考えたのである。阿Q精神の場合には、共通性は精神勝利法一般、特殊性は辛亥革命期の中國農民の精神、というように。

④については、阿Qやドン・キホーテのように、實生活で流行するまでになつた典型的形象の影響は、もちろん典型的形象を研究する完璧な科學的根據ではないけれども、辯證法的唯物論者として、そのような作品の社會的作用と客觀的交果を無視できないとした。

以上のような李希凡への反論の後、何其芳は典型研究の意義を次のように述べて、この問題に對する態度を明らかにした。

「典型問題の研究は、我々がいかに正確に過去の文學作品中の典型的人物を解釋するかに關係があるだけではない。更に重要な意義は、それが我々の創作實踐と密接な關係がある、という事である。もし典型性が完全に階級性と等しく、典型の共通性は階級性であり、典型の特殊性は階級性の具體的表現、あるいは個人の好み、氣質、習慣の類にすぎないと考えるのなら、これは我々の創作實踐にとつて不利である。これは、我々の典型的人物を塑造する場合の廣闊な天地を制限することになる。これは、作品のこの場合の深さと獨創性に影響することになる。」（傍點引用者）〔序文二十頁〕

傍點部分からも明らかなように、この何其芳の見解が周揚らの「中間人物描寫論」「題材廣範論」と共通の基盤にたつものである事は、いうまでもあるまい。中間人物描寫論は、作品の中で英雄的人物すなわち勞農兵の階級性が集中的に表現された形象のみを描く事に反對し、量的には人民の大多數を占める中間人物を積極的に描寫し作品の幅を廣げよう、という主張である。何其芳のこの文章が、中間人物描寫論の理論的補强に使われたとしても、少しも不思議ではない。ともあれ、これは文革で打倒の對象にされた論理である。

四

それでは、次に李希凡の何其芳への再反論を考察する事にしよう。(7)

李希凡は、何其芳との阿Q精神をめぐる意見の對立を次の二點に整理した。

①阿Qおよびその精神勝利法は、典型的環境の中での典型的性格か。それとも、異なつた時代、異なつた階級がいずれもうみだす事が可能な、普遍的「共通性」か。

②いわゆる「共通の名」の影響は、典型をはかる役割になるかどうか。「共通の名」說は、典型問題の本質を反映するかどうか。

李希凡は、彼自身の阿Qをめぐる問題についての主張を次のように再度まとめた。

1阿Qは、特定の時代（辛亥革命前後）の階級矛盾の中の遲れた農民の典型である。

2半封建半植民地の封建統治者、およびそのさまざまな隷屬者が、阿Q主義をうみそだてる階級的根源である。

3農民である阿Qの身上の精神勝利法をつくりだしたものは、封建支配者の殘酷な壓迫およびその精神的害毒であ

る。

すなわち、李希凡の何其芳への批判の根本は、何其芳が典型的性格には階級性を越えるものがある、と考える事に對してであつた。この何の論點は、辛亥革命前後の中國社會以外の社會、時代においても阿Q精神をみつけだす事ができる、という主張を必然的に產みだすが、それならばそれは結局「古代から今日までの人類發展史を貫く」ものになつてしまうではないか、と李希凡はつめよつた。何其芳は自己の論據として、辛亥革命前後の中國社會以外の社會でも、精神勝利法が實際に存在している事を指摘した。この點については、ロシア小說中の知識人の典型の差異を指摘し、彼らを〝餘計者〟という共通性のみから考察するなら彼らは完全に混同されてしまつて典型としての意味をなくしてしまう事などを例にあげ、辛亥革命前後の中國以外の社會の精神勝利法は、阿Q精神と似ている點があるとしても別のものである、と主張した。李希凡は、典型的性格を、それをうみだした典型的環境＝階級矛盾やそれが屬する階級から離れて考察する事は、結局人間性論になる（そしてそれはマルクス・レーニン主義からの逸脫にほかならない）と考えたのである。

更に、李希凡は典型的性格の把握そのものについて、何其芳を批判する。

先にみたように、何其芳の典型の把握は、典型的性格そのものはもちろん階級性をもつけれども、典型的性格の「最もきわだつた特徵」は「共通の名」として時代や階級を越えた影響をもつ、という事であつた。

李希凡は、この觀點を全面的に否定する。

「どんなに深みのある、豐富な典型であろうと、それはつまるところ時代の階級矛盾の產物であり、その規範性の効果は、ただ『同時代人』だけであり、ひとたび時代が過去になると、それは必然的にしだいにその『規範作用』を失つていく。」〔「新建設」六五年第二期四五頁〕

「本當に深みのある豐滿な文學典型は、永遠に死ぬ事はない。すなわち、それらを產みだした社會條件の消失によつて、それが『規範』の作用を失つても、依然として認識上、美學上の價値および一定程度の教育上の役割を保つ事ができる。しかし、これは、明らかに過去の普遍的社會的意義とは異なつている。抽象化された『共通の名』作用を用いては、その眞實の價値を說明できない。」〔同〕

すなわち、典型的性格が眞に普遍的であるのは、それを產みだした社會的條件が存在している間だけで、その條件が失

われた後、作品を鑑賞する者は、たとえその作品の內容の高さに依り感動する事はあつても、その感動の質はもはや作品成立時の讀者が受けたものとは異つている、というのである。

これらは次のように整理できるだろう。

人は過去の古典的文學藝術の典型に感動する。だがそれは、その典型的性格がうみだされた時そのままではなく、それを通じて、作品を鏡として、その中に自己の屬する時代、階級をみているのである。典型的性格そのものは、上部構造として下部構造の消滅にともない、當然その意義を失つていく。ただ、深く豐かに生活を概括した優れた典型は、認識上、美學上の價値や教育的効果を殘している。しかしその典型的形象から受けとる感動、印象の質は時代や階級が異なれば、當然變わつてくる。

これは確かに何其芳と正面から對立する意見である。何其芳は、典型的形象の最もきわだつた特徵が、時代や階級を越えて讀者と共通性を持つ爲に、感動を與えるのだとした。

古典から受けとる感動、印象の質について、一方は時代、階級を越えた共通性があるといい、他方はないという。互いの論理をおし進めればこうなる筈である。論點は一致するどころか逆に、（當然にも）畫然と分かれてしまつた。

李希凡の論理が文革推進派の論理そのもの、或いはそれと極めて近い關係にある事は、間違いない。それは、文革の文藝面における綱領的文章である「林彪同志の委託によつて江青同志がひらいた部隊の文學藝術についての座談會の記錄要綱」が次のように述べている事でも、わかろう。

「黨の正しい路線にみちびかれて、つぎつぎとあらわれた勞働者、農民、兵士の英雄的人物、そのすぐれた品性は、プロレタリア階級の階級性の集中的なあらわれである。われわれはあふれるばかりの熱情をかたむけ、あらゆる手をつくして勞働者、農民、兵士の英雄像をつくりあげなければならない。」（傍點は引用者）

この事は、先に觸れた何其芳の場合とあわせ、古典文學藝術の評價が、典型をいかに解釋するかという文學理論上の問題だけでなく、典型をいかにして作り出すかという、創作の問題とも密接な關連をもつている事を示している。

ただ、李希凡の論理は「本當に深味のある豐滿な典型」が、それを產み出した社會的條件が消滅した後も「認識上美學上の價値」を持つという點と、階級性の關係が今一つ說明不足のように思われ、この點を何其芳が批判すれば論爭は更

に發展したと思われるが、何其芳は再反論を行なわなかつた。[8]

文化大革命推進派からみれば、何其芳の論理が人間性論にみえても不思議はない。階級性が一切に優先するという觀點からは、典型的性格の中には階級性を越えたものがあるという見解は、人間性論として打倒されるほかない。中ソ論爭の過程で、中國はソ連の〈全人民の黨、國家〉論に對抗すべく、階級性を極端に强調するが—その政治的歸結が文化大革命であろう—路線として、階級性の强調が確定したなら、それに反する傾向が修正主義として排斥される事も論理的に當然であろう。だから周揚はさまざまな政治技術を弄しつつも、結局は失脚せざるを得なかつたのであろう。現在のところでは(一九七五)、何其芳の理論も周揚と運命をともにしているようである。[9]

しかし、この事は李希凡の理論の全面的勝利を意味するものでは、もちろんない。文化大革命の一應の勝利にともなつて、大部分の古典的文學藝術の評價が凍結されてしまう、という事態が生じてしまつたのである。古典的文學藝術は、當然の事ながら、舊時代の支配階級のイデオロギーの影響を强く受けており、文學藝術の意義を、讀者の勞農階級としての階級意識の向上への寄與、ととらえる限り、そのような教育作用を直接的にもつた作品はほとんどないからである。批林批孔運動にともなつて、新たな古典再評價運動が開始されてはいるが、まだ部分的であり、しかもかなりの無理が感じられる。[10] 文學史思想史のどの斷面も「二つの路線の對立」(それは春秋戰國時代から今日まで、二千數百年間本質的には變化しないまま、續いている)として把握され、文學史の記述は發展の辯證法を缺いたものになつてしまつた。過去の支配階級の影響をうけた古典と社會主義との關係を明確にしきらない限り、李希凡は—卽ち文革派は—勝利したとはいえないであろう。

五

今、何其芳、李希凡の論文をもう一度みると、何其芳には、五六年と六四年の間に本質的な論理の變化はない。後者の方がより詳細になつているだけである。それに對して李希凡には、五六年と六五年の間に、思想的に相當な變化があつたようである。次の二つの引用文をみていただきたい。

「魯迅は多くの作品の中で、確かに大衆の革命的力量に對する懷疑を表現した。しかし明らかに、この懷疑は複雜な狀

態の中にあり、彼には人民の革命的力量の追求と探索について、懐疑と信頼が交錯して出現しており、決して完全に固定した形態をとつていなかつた。（中略）魯迅は、現代中國第一の、自己の創作と被壓迫農民の運命とを一つにした革命的民主主義者であり、彼は深い同情をもつて、農民の悲惨な生活を描寫した。『阿Q正傳』の中にも、魯迅の、被壓迫農民が必然的に革命に向う事についての固い信頼が、はつきりと表現されている……」（『阿Q正傳』について）〔「弦外集」三一頁〕

「阿Qの典型的性格の創造の中で、啓蒙主義者魯迅の反帝反封建の革命精神が示されているだけでなく、同様に彼の革命的民主主義者としての限界も烙印されている。この時、魯迅はまだマルクス主義者ではなく、阿Qの『その不幸を哀れみその不幸を怒る』については、彼はつまるところまだ人民大衆の外に立つていた。彼は人民大衆のおくれた精神狀態をほんとうに洗い流すのは、プロレタリア階級が領導する革命運動だけであり、啓蒙主義の『撩救』では決してないという事を、まだ認識する事も理解する事もできなかつた。」（「阿Q、典型、共通の名およびその他」）〔「新建設」六五年第二期五十頁〕

引用文について解説を加える餘裕はもはやないが、李希凡の思想の變化は、この五六年と六五年の二つの前期魯迅評價の落差に、はつきりと現れているであろう。(11) そして、この變化は、文化大革命の理論の純化の過程でもあつたろう。

〔注〕

（1）ここでは「文學藝術的春天」北京第一版第一次印刷（六四年刊）收錄のテキストによる。初出テキスト筆者未見。

（2）三論文とも「弦外集」第一版第一次印刷（五七年刊）收錄のテキストによる。初出テキストはいずれも筆者未見。

（3）「『阿Q正傳』について」

（4）筆者未見。（1）（2）（4）の初出テキストは、いずれも單行本收錄の際、細部の修正を受けている事が、彼ら自身あるいは相手によつて指摘されている。しかし、單行本收錄テキストから讀みとれる範圍では、兩者とも、論旨の根本にかかわる修正は行なわれていない。

（5）李希凡、藍翎「紅樓夢評論集」北京第一版第一次印刷（一九七三年刊）收錄「三版後記」

（6）人間性論とは、人間を考察する場合階級性を捨象し、抽象的な「人間」とみなす見解を指す。人間性論批判は、文化大革命では文化面の根本方針であつた。

（7）「新建設」六五年二期に掲載。

（8）この後、「新建設」誌には六五年第七期に計永佑「〝共名〟

説淺議—李希凡同志との討論」・六五年第八—九期に孟偉哉「典型共通性の時代と階級性の問題—何其芳同志との討論」が掲載されている。しかしこれらはさして重要ではあるまい。

(9) ただ、何其芳芳自身は黨を除名される事がなかつたらしい。「紅樓夢評論集」三版後記では、周揚はよびすてであるが、何其芳には同志という敬稱が附されている。

(10) たとえば、法家思想の積極的再評價も、儒教に對する反抗、批判の側面を強調するあまり、支配階級のむき出しの統治技術というむしろ法家思想の本質と思われる部分については、故意に目をつぶるという無理を犯している。また七四年初頭の西洋近代音樂の評價をめぐる討論（日本の商業マスコミに「ベートーベン批判」として興味本位に紹介されたもの）では、つまるところ西洋ブルジョア音樂を大衆的に普及させるべきか否かという根本問題については、何一つ明らかにする事ができなかつた。

(11) 附言すれば、何其芳は二つの論文を通じて魯迅の思想性の問題には觸れていない。彼の第一の關心事は、阿Qという典型的形象それ自體にあつたからであろう。